

## 「こんなものを読んで…ません」(42)

「ミネルヴァ計画」J・P ホーガン（創元 SF 文庫）

校長・鈴木 健

この本は J・P ホーガンの人気シリーズ「星を継ぐもの」シリーズの第 5 巻です。なのに、なぜ読んでいないのか…。

シリーズ第 1 作の「星を継ぐもの（1980 年に日本語版、以下同じ）」は、発売から 50 年経った現在も、大きな書店の SF コーナーには置いてある時代を超えた傑作です。本校の図書館にも入っていたと思います。

「星を継ぐもの」の出だしはこんな感じです。月面探査が進む 21 世紀、月の岩陰から、どこの国のものでもない宇宙服を着た死体が発見されます。年代測定の結果、この死体は 5 万年前のものという結果が出ます。同じころ木星の衛星ガニメデでは、地球の科学をはるかに超える宇宙人の氷漬けになった宇宙船が発見されて…。

と、今読んでもいい感じです。続くシリーズ 2 作目「ガニメデの優しい巨人（1981）」も傑作で、ホーガンは一気に人気作家になりました。このころのホーガンは、現実の科学技術を踏まえながらワクワクするような作品世界を創りだしており、科学技術の進歩で人類は幸福になれるとする前向きな世界観もあって読んでいてとても楽しい作家でした。その後もホーガンは「造物主の掟（1985）」や「プロテウス・オペレーション（1987）」など、次々と面白い作品を書いていたので、私は夢中になって読んでいました。

数年前、久しぶりにホーガン作品の日本語版が出版されると聞いて、その「未踏の蒼穹（2022）」を買いました。ところが読んでびっくり、この作品では創造的宇宙論（宇宙は数千年前に神が創ったとし進化論を否定する）や宇宙電磁気説（相対性理論を否定する）などのトンデモ説が「ネタ」ではなく「真理」として語られています。

SF は科学の解説書ではないので、多少の虚構はつきものです。リアル SF 路線の筆頭であるアンディ・ウィアーの作品にも、ストーリーを成り立たせるための嘘が混じっています。しかしホーガン「未踏の蒼穹」は科学そのものを真っ向から否定して、オカルトの布教本のようになっています。これはアウトだと思います。アメリカを代表する SF 作家だったホーガンが、どうしてこんなことに！？ と思うと涙が出てきました。

思えば「星を継ぐもの」シリーズ第 3 作「巨人たちの星（1983）」には、敵は敵として切り捨ててしまう冷たさが感じられ、ちょっと違和感がありました。そのころからホーガンの変質が始まっていたのかもしれない。シリーズ第 4 巻「内なる宇宙（1997）」になると、作風はすっかり殺伐とし、明るくのびやかな感じがなくなりました。

そんなわけで、私は昨年、日本語版が出版された「星を継ぐもの」シリーズ第 5 巻「ミネルヴァ計画（2024）」は怖くて読んでいません。読んだら、かつて素晴らしい作品を次々と生み出していたホーガンの変わり果てた姿を見てしまうのではないかと…。